

(2) . □□□□ □ □

(3) □□□□□□

(152) × (12) × 4 081

(84) × (12) × 4 081

## 奈良・平城京跡右京北辺

(1)は、上・下端、左・右側面が欠損している。表面に三文字分の墨書が認められるが、判読不能である。(2)は、二片が接合する。上端及び左側面が欠損しており、下端には焦げた痕跡が残る。表裏に墨書が認められるものの判読できない。(3)は、上・下端が欠損。(2)は、接続しないが、板材の状態や特徴から同一木簡の断片であつた可能性が高い。

(三好美穂)

|   |               |                      |
|---|---------------|----------------------|
| 1 | 所在地           | 奈良市西大寺東町一丁目          |
| 2 | 調査期間          | 二〇〇三年(平15)八月～一二月     |
| 3 | 発掘機関          | (財)元興寺文化財研究所         |
| 4 | 調査担当者         | 岡本広義・佐藤亞聖            |
| 5 | 遺跡の種類         | 都城跡                  |
| 6 | 遺跡の年代         | 古墳時代前期、奈良時代前期～鎌倉時代後期 |
| 7 | 遺跡及び木簡出土遺構の概要 |                      |

調査地は平城京跡右京一条一・三坊、北辺二坊にあり、西隆寺旧境内、及び「喪儀寮」推定地にあたる。平城京北辺地域には、明治

時代からその存在も含めて議論の尽きない北辺坊が存在する。今回の調査では条坊遺構、掘立柱建物群、井戸、流路などを検出した。



(奈良)

奈良時代前期から中期(西隆寺創建以前)には一条北大路、西二坊大路が設置され、一条三坊側は坪内道

路により坪内を二つ以上に分割して利用していたと考えられる。奈良時代後期から平安時代初頭（西隆寺創建以降）には坪内を分割する道路が消滅し、新たに規模の大きな建物を複数建設する。また、北坊大路側には柵列などが見られるが、道路側溝が存在しないことをトレーナー調査で確認している。九世紀後半から一〇世紀初頭には西二坊大路西側溝が埋没し、西隆寺の瓦を投棄した瓦溜りが見られる。

中世の遺構は、一条北大路を中心として道路沿いに展開する。これらの中世の遺構群は、一二世紀後半を最後として継続しない。

木簡は奈良時代後半の井戸SE-10-16より出土した。他に複数の遺構から、「寺」「下」「石川□□」などと記した墨書き土器が出土した。

## 8 木簡の釈文・内容



(125+76)×25×4 065



赤外線デジタル写真

く判読が非常に困難である。僅かに「郷」かと思われる文字が存在することなどから、あるいは荷札木簡などの可能性も考えられる。

なお、釈讀にあたっては、奈良文化財研究所の渡辺晃宏氏、馬場基氏、山本崇氏のご協力を得た。

（佐藤亞聖）

木簡は井戸枠内中層より出土した。二片に分離しており直接接合しないが、同一木簡の断片であると考えられる。下端部分に両側から浅い抉りを施し、撥状の形状を呈する。上端はへラ状に丸く削り出す。上端の削りは二次的なもので、木簡としての用途を失った後、何らかの木製品に再加工されたものと考えられる。文字は重複が多く